

氏 名		趙 文婧
学 位 の 種 類		博士（美術）
学 位 記 番 号		博美第 41 号
学位授与年月日		令和 7 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件		学位規則第 4 条第 1 項該当者
題 目	学位論文題目	中国の現代生活のための陶磁器デザイン提案 — 蚩手磁器の意匠を中心に —
	研究作品題目	作品 1－1～6 《団欒日和》 作品 2－1～6 《蚩火》 作品 3－1～3 《果実の祝福》 作品 4－1～3 《百果歳時記》 作品 5－1 《点心》
論 文 審 査 委 員		主 査 教 授 長井 千春 副 査 教 授 梅本 孝征 副 査 教 授 佐藤 直樹 外 部 沖縄県立芸術大学 審査委員 教授 森 達也

1 学位論文の要旨

本研究では、蚩手技法を活かし、中国の現代生活のための陶磁器デザインを提案することを目標としている。「蚩手」とは透彫りを施した素地に、透明釉をかけて焼き上げる技法のことである。

まず、蚩手とは何か、蚩手技法の誕生のきっかけとは、中国で大切にされている理由とは、などという疑問を研究の端緒とし、中国陶磁史における蚩手の歴史を研究することとした。本論文第 2 章蚩手の歴史の研究において、蚩手技法は隋代から発展した技法であり、古代から中国で蚩手は陶磁器技法として大切に育まれてきたことを明らかにした。コストを惜しまず作られた少量の蚩手磁器から中国人が蚩手磁器を愛用していたことが感じられ、それを愛用する感情は現代の中国人の中にも生き続けていると考えられる。

そして千年以上の歴史がある蚩手技法が現代中国の日常生活でよく使う食器に活かされている理由とは。蚩手の食器はいつから量産されたか、なぜ蚩手が中国の国民、海外に至るまで中国の伝統工芸として認識されているのか。蚩手磁器の現代化と現代中国の日常生活に関連することを理解するため、中国の陶磁器産業（1949 年以降）の現状を研究した。

第 3 章の陶磁器産業における蚩手の現代化の歴史研究により、1950 年代中国において国营陶磁工場が成立した後、政府が決定した生産指標に従って、蚩手磁器の食器は 40 年以上国营陶磁工場で継続的に量産されてきたことが分かった。国家政策の影響で大量生産ができたことから、蚩手磁器の食器は、国民の日常生活で最もよく使われる陶磁食器の一つになった。現代の中国の日常生活でも、蚩手磁器は非常に馴染み深い存在である。中国のみならず海外まで、蚩手は中国の大切な伝統技法であると認識されているのは、蚩手を中国のシンボルとして打ち出したことが要因であると考えた。しかし、中国の蚩手磁器は国营陶磁工場

の影響を受け、魅力的な表現、現代生活に相応しいものから段々と離れてきたことに気づいた。

一方、フィンランドのアラビア、日本の白山陶器、フランスと日本の蛍手作家を調査してみると、蛍手の製品のデザインや個人作家の作品の表現は中国より進んでいるように思われた。これから中国における蛍手は国営企業の生産方針、輸出の需要から離れ、新たな形で生き続けるべきだと思う。これまで中国の国民は、蛍手の装飾・造形と料理との相性を考えず、様々な料理を蛍手の食器に載せ、頓着せず使用してきた。

筆者は蛍手の歴史的変遷、現代化の発展を調査するなかで、蛍手の文化としての大切さを発見するとともに、中国人が蛍手に愛着を持っていることが分かった。そして筆者の実験を通じ、技法表現の可能性も見えてきた。これからはもっと美しい表現で、美味しく食べられる蛍手のデザインを提案するため、現代中国の飲食文化の中で何が一番いいのかを考えた。中国の広大な土地の中には様々な気候があり、各地で多様な民族が生活し、地方によって様々な食文化が生まれた。筆者は蛍手の歴史の研究、蛍手の作品制作の経験、蛍手の魅力に対する理解に基づき、中国各地の飲食文化に共通する点心文化に着目し、蛍手は点心との相性が良いことに気づいた。第4章点心文化の考察により、中国の点心は歓談をもたらす特徴から、人と人を繋げ、かけ橋のような存在であることが分かった。人と人が繋がるという文化の源流は共食文化であり、中国の独特な飲食文化である。しかし、現代中国の日常生活のなかでは、共食する機会は徐々に少なくなった。この現状を打破するためのデザインを提案するにあたり、新しい生活に応じた新しい食事スタイルの提案も必要だと思う。第5章では、以上の考察から得られた知見をデザインの構成として提示でき、新たな点心文化を反映した現代生活に相応しい蛍手磁器のデザインの提案を行うこととした。

以上の内容に基づき、本研究は蛍手を活かしながら現代中国の日常生活に相応しい食器デザインを提案し、そのデザインを通じて点心文化、あるいは中国の独特な共食文化を発展させるとともに、更新した蛍手のデザインを現代の生活に組み込むことを目指すものである。

2 学位論文審査の要旨

チョウ ブンセイの「中国の現代生活のための陶磁器デザイン提案-蛍手磁器の意匠を中心に-」では、中国における蛍手磁器の発祥と完成までの歴史的な変遷と技術的発展の経緯について文献・収集資料及び現地調査を通じて明らかにした。また、中国の近代以降の蛍手磁器の生産方式やデザインの在り方を検証し、さらに中国日常の食生活に関する考察を通じて得られた知見を基に、新たなデザイン提案の可能性を模索した。中国全域の伝統的な食文化において共通する点心文化が人と人を繋ぐ特性に注目し、中国の現代生活にふさわしい蛍手磁器テーブルウェアデザインを提案した。

【論文】

論文は、5章で構成されている。第1章「研究の概要」、第2章「蛍手磁器の歴史的変遷」では、東アジア全般の陶磁史を丁寧に紐解き、蛍手磁器の発祥と技術条件成立までの経緯、蛍手磁器の中国陶磁史における位置付けを明らかにした。中国では、中東伝来のガラスと陶磁透かし彫り技法が会合する隋代に蛍手陶磁器は出現する。同章に記された技術変遷年表は、

蚩手磁器が完成に至る条件となる窯の変遷、焼成温度、透彫技法、青磁の変遷、青白磁の変遷、白磁の変遷の7項目を軸とし、蚩手陶磁器の進化の過程を明快に示している。この年表は、チョウ ブンセイの文献研究の成果と陶磁制作者独自の視座に基づき作成されたものである。第3章「蚩手磁器デザインの現代化」では、中国における近代以降の蚩手磁器量産化や国民食器としての一般化について、さらに、フィンランド、日本、フランス等、他国の蚩手磁器デザインや蚩手を活かした陶磁芸術について比較考察を加えている。1949年の中華人民共和国成立に伴い設立され10大官陶磁工場の中でも蚩手磁器を量産する紅旗陶磁工場と光明陶磁工場について検証し、現在、蚩手磁器工場として継承された玉柏陶磁会社と富玉陶磁会社で、チョウ氏が研修滞在を経て習得した蚩手技法に関する調査がまとめられている。第4章「中国の現代生活と点心文化」では、長い歴史を有する中国全域の食文化史について文献調査を実施する中で、食と食の間を繋ぐ中国伝統の「点心文化」に着目した。個食化が進み、大家族が食卓を囲む中国独自の共食文化が喪失しつつある現代の食生活において、人と人の関わりを再生する蚩手磁器食器のデザイン提案に重要なコンセプトとなる「点心文化」の考察を深めた。第5章では、蚩手磁器食器として5シリーズの陶磁器デザインを提示し、それぞれの使用状況における点心文化との関わりと独自の蚩手技法について詳細な説明を記載している。

【作品】

創作研究で示す蚩手磁器作品は、作品1《団欒日和》、作品2《蚩火》、作品3《果実の祝福》、作品4《百果歳時記》、作品5《点心》の5つの食器シリーズである。それぞれ4種のオリジナル蚩手技法（①釉薬と粘土練込み、②石膏型に釉薬積重ね鑄込、③ガラスを素地貫通し高温焼成、④③の応用）を組み合わせる表現されている。創作研究は全て中国の食文化を特徴づける「点心文化」をコンセプトとするデザイン提案で、使用され食す状況は異なるが、果物、乾燥果物、菓子、粽など汁気の無い料理や菓子を盛る器である。個食化が進む現代の中国社会において食と食を繋ぎ、人と人を繋ぐとされる「点心」にフォーカスした蚩手磁器の5提案の中でも、最も独創性が高いと評価されたのは作品4と5である。作品4は優れた表現力だけではなく、合目的性のある意匠となっており、磁土素地の空穴をガラスで埋めるという蚩手旧来の特徴を独自の表現へと昇華している。空穴がガラスによって完全に、あるいは不完全に埋まる、欠ける、溶かす、ガラスが染み出すなど、蚩手陶磁器の発祥から蚩手磁器の完成に至る迄の過程で、不完全とされた焼成結果を意図的に表現に取り込んだ表現である。作品5は、中秋の名月に、時節の挨拶として贈り合う月餅や菓子などを詰める蚩手磁器の蓋物である。中国の伝統的のこの贈答文化においても、「点心」は重要な役割を果たしており、チョウの同作品に透かし彫りでデザインされた白兎が温かくその魅力を伝えている。

【口頭発表】

口頭発表では、研究要旨の説明と論文各章の解説について口述した。

第1章から第2章では、まず研究テーマを決定した動機、研究の意義と目的について説明し、蚩手陶磁器の発祥と技術発展の経緯について概観した。中国の近代から現代にかけて展開した蚩手磁器の量産化と一般の国民生活への浸透、国営磁器会社の設立とその製品につ

いて、現代の海外製蛍手磁器のデザインを検証した第3章では、収集した画像資料を提示しながら丁寧に解説した。中国の食文化と点心文化について述べた第4章では、「点心」を創作研究で提案する蛍手磁器デザインのコンセプトとして活かす意義を論理的に説明した。第1章から4章までの研究成果を礎に第5章で展開された5シリーズの作品については、蛍手磁器デザインとその使用情景を自身が作成した動画を再生しながら明快に説明した。論文各章の役割が整合性を持って説明され、創作研究へのプロセスや技法、造形についても調査研究と関連づけながら口述された。

以上のように、チョウ ブンセイは論文及び作品において、陶磁分野に関する高度な知識と教養、理論に裏付けられた創造性、独創性、表現力、論述能力、さらに、社会における研究領域の中核となりうる高度な専門能力を身につけていることを示した。よって、博士の基準を十分満たしている。

3 最終試験結果の要旨

論文、作品、口頭発表等に基づき、口頭試問等を実施した結果は以下の通りである。

本研究でチョウ ブンセイが示した特筆すべき業績は、東アジアの陶磁史と中国食文化史に関する文献調査による考察だけでなく、中国、台湾、日本各地の博物館・美術館や産地に赴き、収蔵品や蛍手磁器を実際に手に取り検証を行ない制作者独自の視座に基づく蛍手陶磁器技術変遷年表を作成したこと、また、現代の中国において伝統的な共食文化が喪失し、個食化が進行する社会課題を見出し、食文化研究の過程で「点心」の重要性に着目し、その分析と考察から食器デザイン提案コンセプトとして導き出したこと、現状の中国景德鎮の蛍手磁器製造工房を訪ね歩き、技術や歴史に関する聞き取り調査を重ね、さらに、旧国営蛍手磁器製造会社の技術を継承する磁器会社で技術研修を実施し蛍手技術を修得し、その経験を発展させた何種類ものオリジナル技法を開発し、優れた蛍手磁器テーブルウェアのデザイン提案とその創作に活かした点である。蛍手磁器の歴史文化的な背景と伝統技術を十分理解した上で、食文化の課題に対峙しデザイン提案を行うと共に、蛍手磁器食器開発を完成まで全工程を自ら実践し提示できる陶磁デザイナーとしてのチョウ ブンセイの力量と独自性を高く評価することができる。今後中国において、陶磁デザインや陶磁芸術に関わる創作者としてだけでなく、教育者・指導者として同文化の継承と向上を牽引する人材となることを期待している。

最終試験において、チョウ ブンセイは論文完成のために資料を博搜した広い視野を持って検証と考察を進め、整合性のある論理展開のもとで独創的な結論を導き出した。創作研究では現代中国で希薄になりつつある人と人との繋がりを再生する蛍手磁器食器デザインを提案し、作品として高い完成度を示した。口頭試問においても様々な質問に対する確かな回答を行った。試験終了後、審査員は論文作品共に非常に高く評価できることを全員で確認し、成績は秀であると判定した。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。